

秋分儀式

I O S 儀式魔術文書 AE03A



THE OFFICIAL ORGAN
OF
I O S

PUBLICATION IN CLASS D
IMPRIMATUR : M FRATER I O S

THE AUTUMNAL EQUINOX CEREMONY FOR ASTRAL WORKING
I O S ASTRAL TEMPLE WORKING

第1章 解 説

本儀式は、小規模な団内グループ(ロッジ単位程度)が、簡易な準備で行える霊的集合儀式(Astral Temple Working)として作成した。従って、実行儀式よりも簡略化した部分がある。

《春秋分点》は、「均衡と調和」を表象する宇宙的な時刻である。年に2回の分点において、太陽の運行または振動と地上の四大元素が融合する。本儀式は、原則的に春分点の前後48時間以内に実施すること。

儀式内容は、地上の神殿から「諸天界への上昇」(rinsing in the planes)により、天上の神殿の前庭たるダアスの広間に伺候するものである。

1 天上の神殿

イスラエルの精緻な「天上の神殿」思想の発達、ディアスポラという民族の運命と切り離して考えることはできない。ギリシャ語のディアスポラ(διασπορά)とは、前置詞「分散する」(διά)と動詞「種を蒔く」(σπορά)を組み合わせた言葉である。当初は単純に、「移住」や「植民」という意味であったが、ユダヤ人の悲惨な異境生活がその典型として知られるようになると、より冷酷で残忍なニュアンスを含むようになった。⁽¹⁾

アフリカ、中東北部、南欧地区には古代世界に覇権を称える大国が勃興した。イスラエルの民が建国したカナン(パレスチナ)は、これら古代帝国の軍隊の通路であった。そのためイスラエルの国家は再三、外国勢力に征服される。アッリアとバビロニアによる捕囚⁽²⁾に続き、ギリシャの侵攻、ローマの支配を受け入れたイスラエルは、ローマ帝国の収奪と宗教弾圧に耐えかねて都合3回の反乱を起こし、⁽³⁾最終的には首都エルサレムとパレスチナの領土を失う。⁽⁴⁾

エルサレムがユダヤ人国家の手にあった時期でさえ、ユダヤ人は外国に寄留する離散(ディアスポラ)の民と、イスラエルの民という2重構造を余儀なくされ、国家を超えた複雑なアイデンティティーを維持してきた。⁽⁵⁾ハドリアヌス帝によるユダヤ国家破却令以降は、離散が全ユダヤ人の運命となった。

ローマ帝国軍による本国の消滅は、ユダヤ人に危機の時代をもたらした。エルサレム神殿の完

(1) ロビン・コーエン『グローバル・ディアスポラ』(明石書店、2001年)11頁。

(2) ケラーは簡明に要約した。「アッシリア人は近東の派遣を握った。ティグラート・ピレセル三世(聖書ではブルと呼ばれている)はイスラエルの地を侵略し、多くの住民を連れ去って捕囚の身にした。その十年後、苛烈なサルゴン二世は北王国イスラエルの首都サマリヤを占領し、残りの人々(特に上層階級)を彼の帝国内の遠く離れた地域へ移住させた。入れかわりサマリヤにはよそから植民者が移って住んだ。この事件によって北王国イスラエルは滅んだ。その十支族のその後の運命は知る術もない。・・・一世紀半の後、葬いの鐘はユダ王国のためにも鳴った。アッシリアの滅亡後に興隆したカルデア人の王国の支配者であるバビロニアの王ネブカドネザルの下に、ユダは荒廃しエルサレムは征服され破壊された。ソロモンの神殿は灰燼に帰した。二回の引き続く大規模な移動を強制され、民族の栄華は追放され、バビロン捕囚となった。一部の人々はエジプトに逃亡することに成功した。畑やぶどう園を耕していたごく少数の人々がこの地に残った。しかし、ユダに外国人は導入されなかった。」

なお、サマリヤ占領は紀元前722年、ユダ王国滅亡は紀元前586年である。(ウエルネル・ケラー『ディアスポラ』上、山本書店、1982年、15頁)。

(3) M.シュルテン「『ユダヤ戦記』とローマ帝国」『ヨセフスとユダヤ戦争』(山本書店、1985年)77-91頁。

(4) 「それは135年頃陥とされた。・・・バル・コホバとその部下全員が死んだ。・・・ハドリアヌスは今やユダヤの中に異教の都市を建設する彼の計画を実行することが可能になった。神殿の丘から昔の聖所を思い出させるすべてのものを一掃するため、鍬が動いた。そのあとに、ローマの植民都市アエリア・カピトーナが建設され、・・・外国人が植民した。・・・そしてユダヤ人たちがこのアエリア・カピトーナに入ることは死刑をもって禁じられた。ユダヤという名称さえ抹消された。それ以後この土地は、かつて海沿いの「ペリシテ人の地」に住み、イスラエルの敵であった民族の名にちなんで、パレスチナと呼ばれるようになった。ローマの命令により、これ以後いかなるところにも「ユダヤ人の土地」が存在してはならなかった。・・・彼はユダヤ人の精神を根絶やしにすることを欲し、異教を強要した。宗教迫害をもって追い打ちをかけたのである。・・・皇帝の命令によりユダヤの律法と伝承に従うことは死刑をもって禁止された。割礼も、安息日を祝うことも、トーラーの教えも許されなかった。その他あらゆるユダヤの習慣も同様に刑罰の対象となった。」(ウエルネル・ケラー、前掲書、102-104頁。)

(5) 左近義慈・南部泰孝『聖書時代の生活』(創元社、1982年)154頁。

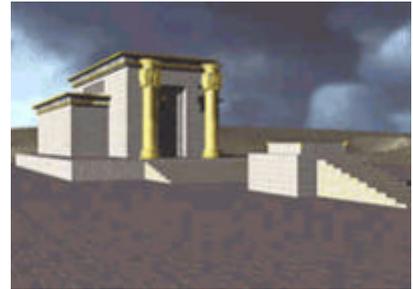
全な消滅は、ユダヤ民族の精神的支柱が祭祀階級のレビ族から、⁽⁶⁾ 律法教師に移行することを意味した。新たな民族の精神的指導者たちは、危機の時代に対応した宗教解釈⁽⁷⁾ 及び迫害時の免責事項⁽⁸⁾ について意志統一を迫られた。

イスラエルの神殿は、未発達な多神論宗教のように「居住神殿」ではなく「臨在神殿」であった。⁽⁹⁾ 神殿は放浪時代の幕屋と同様に、神の臨在する座標に過ぎなかった。何故なら「かれらに私のために聖所を作らせなさい。わたしが、それらの中に住むためである。」(『出エジプト記』25章8)と書かれてあり、「その中に」ではないからだ。⁽¹⁰⁾ イスラエルの神は偏在する。

その座標を「契約の筐」諸共に失ったユダヤ人は、神の臨在はメシアが最終的に来臨するまで離散のユダヤ人とともにあるという「シェキナーの流謫」理論を発展させた。⁽¹¹⁾ また、メシア来臨に備えて心の中に「天界の神殿」を築き、⁽¹²⁾ シェキナーを帰還させるという祈りも行われた。⁽¹³⁾ ユダヤ人の宗教家はこぞって民族の宗教的、倫理的努力を説いた。⁽¹⁴⁾

ラビ文学によれば、「神殿ありし日々においては、大神官が地上の神殿で供犠を行うと、天上の神殿では大天使ミカエルが同じく供犠を捧げた。」⁽¹⁵⁾ とあり、天地の供物は全き調和のうちに同時に執行されていたのだ。また、「祭壇に集う天使たちの前に、香、香炉、そして三つの盃があり、天上の空が香煙の雲に覆われんばかりに薫蒸していた。」⁽¹⁶⁾ ともある。

従って、一般のユダヤ人は地上のイエルサレム、ありし日の神殿の方角に面して祈り、⁽¹⁷⁾ 秘儀参加者はその方角に天上のイエルサレム、天上の神殿を想起して祈るのである。



(6) フラティウス・ヨセフス『アピオンへの反論』(山本書店、1977年)216頁。

(7) 「革命(バル・コホバの乱)の失敗による悲惨な離散は、神に背いた罪の報いであり、罪が許されるときには再びカナンの地に復帰することができると、彼らは確信していたのである。」志村武『シオニズム・ユダヤ教と仏教』人間の科学社、1972年、)98頁)。

(8) ローマによる追放後、ルツダにおいて秘密裏に開かれたラビ会議における迫害時の免責事項は、次のように決着した。「その宗教のゆえに死をもって脅かされているユダヤ人にとって、自分の命を救うために表面上ユダヤ教を放棄することは許され得るか?・・・律法の教師たちの意見は分かれた。ある教師たちはすべてのユダヤ人はその信仰のためには命を捨てる義務があると主張した。他の教師たちはこの厳しい勧告を否定した。・・・長く激しい議論の末、ラビたちは妥協点に到達した。すなわち、強迫の上での殉教の死を避けるために、律法の遵守は中断することができる。ただし、偶像崇拜、姦淫、及び殺害は例外とする、というものである。」(ウエルネル・ケラー『ディアスポラ』上(山本書店、1982年、104頁)。

(9) R. E. クレメンツ『旧約聖書における神の臨在思想』(教文館、1982年)147-149頁。

(10) Aryeh Kaplan, "Jerusalem: The eye of the universe", in The Aryeh Kaplan Anthology, New York: Noble Book Press, 1998, p.23.

(11) シュバルツは、『タルムード』の引用として「シェキナーの流謫」(the Exile of the Shekinah)の神話を解説する。バビロン捕囚を預言した『エレミア書』を典拠に、ルーリアの弟子が主の宮居の破壊された後に佇む黒衣の寡婦のすがたを借りた神の臨在の霊(シェキナー)を幻視した様子を描写する。そして、ローマによる追放の後も、シェキナーの流謫は続いており、破壊された神殿を後にして、メシアが来臨するまで離散のユダヤ人とともに留まると説明した(Schwartz, Howard Gabliel's Palace Oxford: Oxford University Press, 1993, pp.18-19)。

(12) Victor Aptowitz, "The Celestial Temple as Viewed in the Aggadah", in BINAH Studies in Jewish Thought Volume 2, New York: International Center for University Teaching of Jewish Civilization p.2.1.2.

(13) コルバンは、『エゼキエル書』を引用しつつ、「形相の神殿」(Imago templi)のシェキナーの帰還について記述する。しかし、神殿の修復は現実空間では行われぬ。シェキナーは流謫の民とともにあり、かれらの霊的神殿のもとに帰還する(Henry Corbin, Temple and Contemplation London: ISLAMIC PUBLICATIONS, 1986, pp.284-287)。

(14) 「汝の言及せるこの木とは何か?・・・木は何によって花を咲かせるのか。イスラエルの民によってである。彼らが善良にして義を守るならば、シェキナーが彼らのもとに住まうのだ。」(Trans. by Aryeh Kaplan, The Bahir ILLUMINATION, York Beach: Samuel Weiser, 1989, p.45 (English) and p.220(Hebrew))。

(15) Victor Aptowitz, op. cit., p.2.1.15.

(16) infra

(17) Aryeh Kaplan, op. cit., p.44.

2 司官の配置

(1) 司官の指定

本儀式に必要な司官は、PRAECEPTOR (P C)、すなわち「先導者」の1名である。

P C は、黄金の夜明け団の伝統的な白の法衣を纏い、白のネミスをかぶり、マントやその他の役職記章はつけていない。右手に「ハイエロファントの棒」をもつ。それは神殿を開き、つなげる権威の象徴である。

他の参列者は、内陣団員は白の法衣と白のネミスを、外陣団員及びプロベিশヨナーは、黒の法衣と白黒縞のネミスをかぶり、手には何も待たず参集する。

ディオーン・フォーチュンの内光協会のアストラル神殿儀式では、参集者は儀式場に座ったまま、光体（かれらはアストラル体と呼称）を下位アストラル神殿に投射する。そのとき光体は全裸であり、神殿の着衣の間 (Robing Room) において、光の法衣を纏う。



(2) トーラーの宰相の召喚

司官は、マルクト神殿でトーラーの宰相を召喚し、メタトロンの顕現たる大天使の長上「肉の衣を去る」までは、実効上の神（天使を使役する者）として活動する。この場合の「肉」とは、魔術師の「光体」である。

トーラーの宰相とは、大天使のうち「宰相」(prince) と呼称される高位の役職群の上席を占める者である。メタロンがその筆頭に当たる。他の「宰相」職には、「夢幻の宰相」(Sar ha-Holam) などがある。トーラーの宰相は、翼を豊んだ長身の白く輝く法衣を纏う成人の天使として顕現する。大地と同じくらい高齢のように見えるが、その顔は赤く輝いており、幼子のように若々しく見える。⁽¹⁸⁾

召喚されたトーラーの宰相は、P C の「本然之性」⁽¹⁹⁾ と融合する。



3 アストラル神殿の構造

本儀式においては、マルクト神殿から出発し、イエソド神殿、ホド神殿、ネツアク神殿を通過し、ティファレット神殿に至る。ティファレットからダアスの広間に上昇し、主の栄光を垣間見る。

(18) メタロン伝承には、長老エノクが昇天し変容したメタロンは、天文学的な寿命をもつ他の天使たちより若いので「若者」(Yenuka) と呼ばれる件がある。

(19) この「本然之性」とは、朱子学の「天理即本然之性」より派生した言葉であり、天理に等しい性善の本性を意味する。江戸時代には石田安吾などがこの主張を押し勧めた(山本七平『日本人とは何か』下巻、PHP研究所、1989年、278-279頁。)

また、西洋のルネサンス期には『ピカトリクス』第3巻4章のアリストテレスとの対話「『かく言う汝は何者であるか?』かれ答えて曰く『われは本然の性。われに会わんと欲せば、わが名を呼べ。』」を受け、人間の自由なる上位靈魂「本然の性」(natura completa) として重要視された (PICATRIX The Latin version of the Ghayat Al-Hakim, London: The Warburg Institute, 1986, pp.109f.).

4 魔術の教理及び技法的側面

(1) 霊的浸礼 (Mikvah)

ユダヤ人の生活習慣において「沐浴」(トゥピラ)が肉体を清める行為を指すのに対し、「浸礼」(ミクヴァ)は、靈魂を清めることを意味する。

元来、ミクヴァ(מִקְוָה)とはヘブル語で「浴槽」または「(水を)集めること」を意味した。聖書には、「泉及び水の集まる(ミクヴァ)水たまりは穢れない。」(『レビ記』11章36)とある。

従って、ミクヴァは「儀式的な浸礼をすること」と同時に、浸礼する場所、浴槽を意味する。ユダヤ教の宗教規定のなかでは、ミクヴァは改宗者の浸礼、異教徒から入手した食器などの清め、そして、年に一度の贖罪の日(ヨム・キプール)の準備などに行われた。しかし、このミクヴァを日常の修行に組み込んで日に何度も行うようになったのは、ハシディズムの影響である。

もちろん、普通のユダヤ人が日に何度もミクヴァを行う訳ではない。家庭でシャワーを浴びてそれで済むようなものではないのだ。ミクヴァには、「生きた水」が必要とされる。それは全身を浸すだけの雨水や湧き水を満たした浴槽か、川で行われる。

現代のイスラエルの裕福な家庭では、家庭用の浸礼場を準備することもあると言うが、大多数は町の浸礼場に行き行って済ませている。

この集団浴槽としてのミクヴァは、胸まで浸かる小さなプールのようなものだ。特徴的なのは、主な水路のほかに、浴槽の水線下に直径数センチの横穴が開いている。その横穴の先には、より小型の蓋つきの水槽がある。その中には、自然の雨水、泉水、雪解け水などが満たされている。規則によれば、その中には40サー、つまり、約200ガロンの自然水を入れることとされている。⁽²⁰⁾

さて、霊的な浸礼は、本来、神殿に入る前に儀式的に心身を清めるために行われた。

十分な深さの水のなかで、頭のとっぺんまで水に浸すことがミクヴァの基本であり、日本の神道の禊ぎ行と相通じるものがある。

あるハシディズムの流儀では、水のなかに立ち、『詩篇』の章句を祈りながら7度水に浸かるといふものがある。すなわち、首までくる水のなかに立ち、自分自身が罪により死に陥ることを想起する。そして、潜るように全身を水に浸し、罪の赦しを請い願う。『詩篇』の51章の12節を7度唱える。主があなたを新しく創造し直し、清浄なる心臓を与えて下さるように、その章句の繰り返しごとに水に浸る。このミクヴァに主の臨在し賜うことを瞑想し、周囲の水にシェキナーの降臨を想起する。

この種のミクヴァは、瞑想行に等しい。

アレイ・カプランによると「人の肉体が物質的なミクヴァに与るときは、その至上の靈魂は霊的なミクヴァに与っている。」という。

また、『ゾーハルの書』によれば、肉体は水で清められ、靈魂は天上の火の河で浄化される。従って、ミクヴァの礼とは、今生のうちにデヴェクスによってエデンの苑に入るための手段なのである。

ハシディズムのあるラビは「ミクヴァの本質とは、智恵の河による清めをもって、靈魂の浄化を図ることである。だから、物質の水や、その水に身体を浸すという行為が絶対に必要とされる訳ではない。」と語る。

今回の儀式では、自らの靈魂の外套を、エデンから流れる「五大の河」の霊的な液体で浄化し、ダアスの広間における神聖の顕現に備える。

五大とは、地風水火に加え、ラビ・ナハマニデス(R.Moses Ben Nachman Gerondi)とラビ・スフォルノ(R.Obadiah Ben Jacob Sforno)の創世記の解釈において、第5元素と解釈された「光」を加える。⁽²¹⁾この五大元素による霊的浸礼を率領する大天使は、下表のとおりである。



(20) Aryeh Kaplan, "Water of Eden: The Mystery of the Mikvah", in The Aryeh Kaplan Anthology, New York: Noble Book Press, 1998, p.314.

(21) 「ナハマニデスとスフォルノはともに、天界の素材として第5の天上の元素を加えた。」(Norbert M.Samuelson, "Creation in Medieval Philosophical Rabbinic Commentaries", in From Ancient Israel to Modern Judaism Volume 2, J.Neusner(ed.), Atlanta: Scholars Press, 1989, p.243.)

ミクヴァ	ミクヴァを宰領する大天使	開門の印章
地の浸礼	大天使ウリエル・アレツィエル	הַרְוִיָּה (テホリヤー)
風の浸礼	大天使ラファエル・ルアキエル	לְרַחֵם (ラカツィエル)
水の浸礼	大天使ガブリエル・マイメル	הַמַּיָּם (エミアー)
火の浸礼	大天使ミカエル・エシュエル	לְמִשְׁכֵּל (メシエル)
光の浸礼	大天使サンダルフォン・オーリエル	קוֹמְדֵשׁוּן הַמְּקֻדָּשׁ (コマン ハ・ミクデシュ)

(2) パスワード (Password)

パスワードを記録する著名な作品は『ミトラ祈祷書』である。神霊の畏るべき来訪に先立ち、術者は唇に指を当て「静寂なれ、静寂なれ、静寂なれ。」と唱え、引き続いて神から与えられたパスワード(σύμβολα)を唱えねばならない。(PGM 558-560)⁽²²⁾

このパスワードをテウルギアでは、συνθήματαとも呼ぶ。古典古代の密議宗教においては、儀式の特定の部分で、達人が儀式を執行する資格を有していることを証明する符丁として用いられた。⁽²³⁾

(3) 七つの封印 (the Seven Seals)

メルカバ神秘主義における自己の封印(קַוְוָה)とは、神聖名を用いて防護や、パスワードの役割を期待するものである。⁽²⁴⁾メルカバ神秘主義の実践者は、封印する箇所に神聖名を記した紙などを当てることもあった。

ここでは『マセー・メルカバ』の示唆する方法で、身体の個々の部分と全体を下方から順番に封印する。⁽²⁵⁾この記述は、シェイファーの分類では、§566のマイクロフォルムに該当する。また、§562にも封印のやり方が解説されている。

ユダヤ教以外の神秘主義では、七天球に照応させる場合もあるが、七箇所の封印には、七惑星や、セフィロトとの特別の相関はない。

また、PCが封印を実践する際には、黄金の夜明け団の「神聖名発音振動様式」を準用する。⁽²⁶⁾すなわち、ケテルから引き下ろした白輝光を封印する肉体の場所(第6の封印では太陽神経叢)において、その箇所に意識を集中させ、神聖名を振動させる。

(4) 諸天界への上昇 (Rising in the planes)

黄金の夜明け団の内陣専用文書『飛翔する巻物』第11巻に基づき「諸天界への上昇」を実施する。⁽²⁷⁾同書において、次のように定義された霊視の第3段階の適用である。

この技法は「生命の木」ダイアグラムに沿って行われる。

中央の柱を上昇し、マルクトからティファレトに至り、この霊的太陽に座を占めて、小径を確認する(位階が許せば、ダアスからケテルへと上昇する段階もある。)ものだ。

本儀式においてパロケトを7層の帳と表現したのは、人間の霊魂が清浄界から星辰界を經由して地上に下降するとき、7惑星の影響力を衣としてまとい、上昇するときは、それを脱ぎ捨てるという伝承による。その好例が『ヘルメス文書』にある帰昇する霊魂が七つのハルモニア(諸天宮)に帰因する「作用力」を返し、「第八のもの」に至る描写に見える。⁽²⁸⁾

メルカバ神秘主義における「霊魂の帰天」は、後期グノーシスの『イエウーの二つの書』の

(22) Hans Dieter Betz, *The Greek Magical Papyri in Translation Volume one : Text*, Chicago : University of Chicago Press, 1986, p.49.

(23) Sarah Iles Johnston, "Rising to the Occasion : Theurgic Ascent in its Cultural Milieu", in *Envisioning Magic*, Leiden : Brill, 1997, p.187.

(24) Rebecca Macy Lesses, *Ritual Practices to Gain Power*, Harrisberg: Trintinty Press, 1998, p.82.

(25) Michael D.Swartz, *Mystical Player in Ancient Judaism*, Tubingen: J.C.B.Mohr, 1992, p.138f.

(26) リガルディー編『黄金の夜明け魔術全書』(国書刊行会、1993年)270-271頁。

(27) フランシス・キング編『飛翔する巻物 : 高等魔術秘伝』(国書刊行会、1994年)88頁。

Edited by F.King, *Astral Projection, Ritual Magic, and Alchemy*,

Wellingborough : The Aquarian Press, revised 1987, p.76.

(28) 『ヘルメス文書』(朝日出版社、1980年)74-76頁。

記述等と驚くべく類似性を有する。⁽²⁹⁾その他の中東における「上昇神話」を解析しても、同様の結果が現れるので、門番の恫喝を印章を利用して突破するというスタイルは当時の常識（流行）であったと推察される。

なお、ディオンのフォーチュンはこの技法の詳細な検討を実施している。⁽³⁰⁾

5 身辺の準備

(1) 部屋の準備

部屋を暖かくし、プライバシーを保護できるような態勢づくりをする。（家族に部屋に入らないように断ってからドアの鍵を閉める等）、携帯電話、アラームの類はあらかじめ切っておく。部屋の中央に椅子か、ソファを置き、その他の不要なものを片づける。

何度も反復して練習し、象徴や、儀式の細部まで呑み込んでいても、外部の妨害ですべてが台無しになることもあり得る。準備は、怠りなく。

(2) シナリオ

シナリオ文書を一部、手軽に確認できる場所に置く。

自分以外のパートの台詞とト書をテープに吹き込んでおく。

あなたの行動する部分は緑の文字で記してある。

神聖名を発音するときは、注意深く行うこと。

事前のリハーサルは勿論、必須とも言える。

(3) 直前の手順

開始する前に手を洗い（儀式的浸礼）、法衣（または身体を締め付けない服装）に着替え、LBRPを行って椅子に座り、中央の柱の行法で活性化する。

(29) 「汝らが身体の外に出て最初のアイオーンに到達したとき、そのアルコンが現れたら、この印章により自らを封印し、・・・『プロトペルソムボン・チュースよ、退け。汝ら、第1のアイオーンのアルコンたちよ。われはエアザ・ゼオーザス・ゾーゼオスと呼ばれたり。』なる弁明を唱えよ。」（『イエウーの第2の書』52章）

(30) Charles Fielding, C.Collins, *The Story Of Dion Fortune*, Thoth Publications, 1998, pp.165-174.

第2章 儀式

1 神殿への入場

参加者は、座ったまま目を閉じ、自分のアストラル的姿形を形成する。前方に光体を形成する。自らが輝く光の法衣を纏う様子を強く視覚化する。

光の法衣の着用が終了したら、沈黙し儀式の背後にある意味を黙想しつつ待つ。

あなたは、自分の光体の身体を立ち上がらせ、肉体を脱ぎ捨てたまま、前に進み光のトンネルを通過して、アストラル神殿の外庭に着地し、扉の前に立つ。マルクト神殿のヤキンとボアズの柱を通過し、青銅の扉に面すると、扉の表面に刻まれたI O Sの三文字が内側から光を発し、扉は音もなく両側に開く。

神殿の内陣広間に通じる廊室において、兄弟姉妹たちが集っている。

2 ウシャブティ

先頭に立ち、集まった参加者を振り返るPCが静かに命じる。「ウシャブティを纏うべし。」PCは、率先して「小神像（ウシャブティ）」を纏う。

すなわち頭頂の光球から光を拡散し、やわらかな膜のような形に引き延ばして、喉の光球に結びつけ、さらに胸と背を通して、胴の光球を振動させ、腰を振動させ、最後は足下の光球を振動させ、全身をひとつの巨大な光の膜で包み込んでしまう。その無定型のオーラの卵を好みの神、天使、神話的形態に変化させる。この場合は、司官は顔のないアケファロスの姿形をまとう。参加者は、文字通りエジプト神話の代理神像である直立した人間の姿をもつ霊的姿形を纏う。

PCは、廊室の中央の扉をくぐり、本殿に入る。

兄弟たちは、廊室でしばし準備のできるのを待つことになる。

3 物見の塔の儀式

PCは、祭壇の西側に回り込む。自らのオーラを広間全体に広げる。そして、拡張した白く輝くオーラを保持したまま、小五芒星の追儼儀式を行う。引き続き、小六芒星の追儼儀式を行う。

東に面し、開門の宣言を行う。

「ヘカス ヘカス エステ ベベロイ」

さらに、物見の塔の儀式を応用し、霊気を安定させる。

祭壇の南側に行き、南壁に背を向け、祭壇からランプを取り上げる。正面（北）、右（東）、左（西）と三方向にランプを振り言う。

「総ての幻影が去りし後に、宇宙の隠されし深みを飛翔する聖なる形なき炎を見るであろう。

汝、火の声を聞け」

次に振り返り、祭壇を背中にし、南に面する。白と黒の柱の彼方に荒涼とした砂漠が広がる。直立した奇岩なのか、風化した巨石建造物なのか分からない、小山のような石の柱の間に、厩舎のようなオレンジ色のサラマンダーが闊歩している。

押し寄せる熱波に対面し、

自分の目の前に霊の能動の追儼の五芒星を描き、次の言葉を振動させる。

「B I T O M」

引き続き、五芒星の中心に霊のシギルを描き、神名を振動させる。

「A H I H」

L V Xサインを行う。

次に火の追儼の五芒星を描き、言葉を振動させる。

「O I P T E A A P E D O C E」

その中央に獅子宮のサインを書き、神名を振動させる。

「A L H I M」

PCは、フィロソファスのサインを行う。

「大いなる南の四辺形の名前と文字において、われ汝を召喚す。汝、南の物見の塔の天使よ」

祭壇の西側へ行き、西壁を背に盃を取り上げる。三方向に盃の水を注ぎ言う。

「最初に、火の技を治めし祭司は、荒れ狂う海に清めの水を撒かねばならぬ」

次に振り返り、祭壇を背中にし、西に面する。白と黒の柱の彼方に、次々と波頭の押し寄せる

大海原が広がっている。白い波頭は、蹄の代わりに水掻きの生えた水棲の馬である。その鱗の生えた蒼い肌の上に、海の乙女たちが豊かな胸乳をさらして、手綱を御している。

自分の目の前に霊の受動の追儼の五芒星を描き、次の言葉を振動させる。

「H C O M A」

引き続き、五芒星の中心に霊のシギルを描き、神名を振動させる。

「A G L A」

L V Xサインを行う。

次に水の追儼の五芒星を描き、言葉を振動させる。

「E M P E H A R S E L G A I O L」

その中央に鷲のサインを書き、神名を振動させる。

「A L」

P Cは、プラクティカスのサインを行う。

「大いなる西の四辺形の名前と文字において、われ汝を召喚す。汝、西の物見の塔の天使よ」

祭壇の東側に行き、東壁に背を向け、香炉を取り上げる。三方向に香炉を振り言う。

「かくのごとき炎、進る《風》のなかにあらん。また、《声の似姿》を放つ形なき《火》、さらに声高に叫ぶ《渦巻く炎の光》のなかにもあり」

次に振り返り、祭壇を背中にし、東に面する。白と黒の柱の彼方に、丈の高いヒースの草原の緩やかな起伏が見える。その背後には黄塵と、流れ行く遅しい雲の連なりが広がり、黄色っぽい空の雲間には、半透明な存在の乱舞する様子が伺える。

自分の目の前に霊の能動の追儼の五芒星を描き、次の言葉を振動させる。

「E X A R P」

引き続き、五芒星の中心に霊のシギルを描き、神名を振動させる。

「A H I H」

L V Xサインを行う。

次に風の召喚の五芒星を描き、言葉を振動させる。

「O R O I B A H A O Z P I」

その中央に宝瓶宮のサインを書き、神名を振動させる。

「I H V H」

P Cは、セオリカスのサインを行う。

「大いなる東の四辺形の名前と文字において、われ汝を召喚す。汝、東の物見の塔の天使よ」

祭壇の北に行き、北壁に背を向け皿から塩をつまみ上げ、三方向に撒いて言う。

「暗き輝きの地界に屈み込むなかれ。そこには、背信の深みと、闇を纏う冥府王が不可解なるイメージに悦び、風猛き絶壁、黒く逆巻く深淵は、つねに光放たぬ形なき虚しき場に連れ去るものなり」

次に振り返り、祭壇を背中にし、北に面する。白と黒の柱の彼方に、峨々たる小暗い山脈が聳えている。緑の裾野には、無数の生命が満ちあふれているようだが、むしろ、黒い岩肌を晒した山肌に、煌めく金属的な光芒が散らついている。剥き出しの鉱脈の上をノームの工具が叩いているのだろう。

自分の目の前に霊の受動の追儼の五芒星を描き、次の言葉を振動させる。

「N A N T A」

引き続き、五芒星の中心に霊のシギルを描き、神名を振動させる。

「A G L A」

L V Xサインを行う。

次に地の追儼の五芒星を描き、言葉を振動させる。

「E M O R D I A L H E C T E G A」

その中央に金牛宮のサインを描き、神名を振動させる。

「A D N I」

P Cは、ジェレイターのサインを行う。

「大いなる北の四辺形の名前と文字において、われ汝を召喚す。汝、北の物見の塔の天使よ」

祭壇の西に行き東面する。深紅の薔薇で霊の能動と受動の召喚の五芒星を描く。

「E X A R P A H I H
H C O M A A G L A
N A N T A A G L A
B I T O M A H I H」

続けて言う。

「神秘なる統一のタブレットの名前と文字において、われ汝を召喚す。
汝、生命の霊の神聖なる諸力よ」

花を置き、ヴェールを開くポータルサインを行う。

「われ汝を召喚す。汝、不可視の座に住まう天球の天使たちよ。
汝は宇宙の門の守護者にして、またこの神秘なる球の守護者なり。
邪悪なるもの、均衡を失いしものを遠ざけよ。
永遠の神々の神秘の住居を汚さざるため、われに力と霊気を与えよ。
われがその中に入り、神聖なる光の秘密を分かたため、わが球を清浄かつ神聖たらしめよ」

PCは、魔法鏡の内部の安定し、活性化した霊気を徐々に変容させていく。
天使たちの降臨により、激発する直前まで高められた魔術師の意志が、神殿の外壁、すなわち
拡張されたPCの魔法鏡の表面に、鮮やかな変幻する光を生む。それは虹のようにすべてのスペ
クトラムを輝かせる。それと同時に白色を基調とした魔法鏡の内部の霊気が、徐々に赤化し、黄
土色のぼやけた色調から、黄金の光を放つようになる。魔法鏡の表面の極彩色の光芒も、色彩の
輪郭が溶け合うと黄金色にかわり、魔術師の霊気に統合された。広間は、黄金の光に満たされた。

4 入場及び宣言

これらが完全に成し遂げられたら、神殿の西の壁を背にして、東を向き合図の鈴を鳴らす。

PCの霊的な鈴の合図で、参加者の入場が始まる。
兄弟たちは右側、すなわち南の壁際に立ち。姉妹は左側、北の壁際に立つ。

PCは、内側を向いたまま次の言葉を宣言する。
PC：「I O S の兄弟姉妹たちよ。秋分の儀式を開始せん。」

5 トーラーの宰相の召喚

PC：「七つの封印を光体に刻印せん。」

PC：「聖なるかな汝、I I (ヨー)。
智慧と洞察をもて、天と地を造りし者よ。汝が名は永遠なり。
Ch I A V P S I S I P I I A V L V S M B I K I I T h N I I
(カイ オープ シシ パーウ ラブ サム ビー キー タナイー)
そは汝が下僕の名前なり。」

PCは指を剣指をつくり、揃えた両膝に当てる。参加者もPCの動作に倣う。

PC：「A V R I S S S T h I I (アブリース ススティイー)
わが脚を封じる。」

全員：「わが脚を封じる。」

PC、参加者は剣指を心臓に当てる。
PC：「A B G B G G (アバグ バググ)
わが心臓を封じる。」

全員：「わが心臓を封じる。」

PC、参加者は剣指を右肩に当てる。
PC：「A R I M T h I P A (アリム サイパ)
わが右腕を封じる。」

全員：「わが右腕を封じる。」

PC、参加者は剣指を左肩に当てる。
PC：「A V R I S T h S I I A H (アブリース サシ イアー)
わが左腕を封じる。」

全員：「わが左腕を封じる。」

PC、参加者は剣指を首に当てる。

PC : 「 A B I T h T h L B G A R I I V D I V A L
(アブース サル バグ アル ヨー ディヴエル)
わが首を封じる。」

全員 : 「わが首を封じる。」

PC、参加者は両手を胸の前で組む。

PC : 「 A V P A K Q I T R S S A C h D I D I D I H
(アウ バク キテル スス エイカド イダイダ ヤー)
わが生命とすべての部分を守護するために。」

全員 : 「わが生命とすべての部分を守護するために。」

PC、参加者は両手を頭上高く差し出しV字を形造る。

PC : 「 A V P P T h I H V C h I V I V Z H V I H V T h I T h S
(オーブ プター ヤーホー カイウー ヨォー ザハウ ヤーホー サイサス)
わが天蓋を封じる。」

全員 : 「わが天蓋を封じる。」

PC : 「 R I R G V G (リール ゴーグ)
大いなるもの
H P I P H P (ハーブ ヤーブ ハーブ)
清浄なるもの
H H I I V H H I H H H H (ハー イーウ ハーイ ハー ハー)
久遠の詠唱よ。
智慧の主を讃えよ。すべての権能は汝にあり。
聖なるかな汝、I I (ヨー)。
無敵にして、至高、至上、大いなる支配者よ。」

七つの封印を完成したPCは、祭壇の西側から祭壇に向かい両手を広げて言う。

PC : 「わが声を聞け。おお、主よ。
汝は、生成(ゲネシス)にして、始原(アルケ)なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝の真実の子、S h Q D H V Z I H (サクドゥザー)の祈りを聞き賜え。
汝が力を貸し賜え。
われは汝が光のなかで再生せんとす。
われは汝が光のなかで完成せんとす。
汝が天使A R P D S (アルパデス)は語れり。
三つの御名を唱えることなく、聖なる広間に至るなかれ。
そは、次なる名なり。
S D I R T h I N R I A I (サディル ティンリ アイ)
I B I A B I H V S V V T z (イバイアー ビホー スүүツ)
D V P R V P D C h M (ドゥパ ルアバ ダカム)」

PC : 「汝は、われらの父にして、われらの母なり。
われらの栄光にして、われらの輝ける自己が顕現する。
そは本然の性、始原の光体なり。」

PC : 「わが声を聞け。おお、主よ。
汝は、生成(ゲネシス)にして、始原(アルケ)なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝が律法の宰相S h R H T h V R H (サル ハ・トーラ)は語れり。
三つの御名を唱えることなく、聖なる広間に至るなかれ。
そは、次なる名なり。
Z T z T I T z Z R Z I A L (ザッツ ティズ ザルジエル)
T h I T h T h V P I L T I R B T h (ティス トゥピルティ ラブス)
I P A A R C h R Z I O A O I Z V Z
(ヤパー アルカル ジアー アイザズ)」

PC : 「汝は、彗星より火を借り、光の戦を率いる者なり。
われらが足下に大地が見え、また天も見えるなり。」

そは本然の性、始原の光体なり。」

PC : 「わが声を聞け。おお、主よ。
汝は、生成(ゲネシス)にして、始原(アルケ)なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝が顕現の天使MLAK HPNIM(マラキ 八・パニム)は語れり。
三つの言葉を唱えることなく、聖なる広間に至るなかれ。
そは、次なる名なり。
GLI AII (グライ アイイー)
ARDR IHAL(アルダル ヤホエル)
ZK BBIBA (ザク ババイバ)」

PC : 「汝は、夜明けの薄明にして、黄昏の薄明なり。
われらが影のはずれに来たとき、太陽はわれらの頭上にあり。
そは本然の性、始原の光体なり。」

PC : 「わが声を聞け。おお、主よ。
汝は、生成(ゲネシス)にして、始原(アルケ)なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝がメルカバの車輪GLGLI HMRKBH(ギルグリ 八・メルカパー)は、
玉座の前で歌えり。
三つの言葉を唱えることなく、聖なる広間に至るなかれ。
そは、次なる名なり。
HTz PZI PA (ハツ パジパ)
HP IAV (ハバ イアウ)
GHVA ShBIBA(ガホア セバイバ)」

PC : 「汝は、月の秘薬たる光にして、太陽の秘薬たる光の光なり。
われらが玄妙なる物質の心的王国を越えるとき約束は成就せん。
そは本然の性、始原の光体なり。」

PC : 「汝は、われらが主にして王、至高至聖なる霊なり。
汝、燦然たる神の光を身に帯びたる者よ。
汝は聖霊の天の父にして、宇宙の母なり、しかして、心の天の子なり。
われらは汝を召喚し、汝に満たされんとす。
汝、隠れたる者、HDIRIRVM(ハディリルム)！
この血に降下し賜え。
汝、本性の知らざれし者、AL RVZII IVI(エル ルズイー イヨー)！
この肉に降下し賜え。
汝、かくのごとき者、HGGBVB IH IHV(ハググブブ ヤー ヤオー)！
この骨に降下し賜え。
IHVS hH(ヨド・ヘー・ヴァウ・シン・ヘー)
われらは戴冠せる王、天と地の支配者とならん。
IHShVH(ヨド・ヘー・シン・ヴァウ・ヘー)
われらは万軍の将、天と地の支配者とならん。」

祭壇の傍らにいるPCの上に覆い被さるよう出現する
巨大な天使の像がウシャブティを呑み込む。アケファロスの
顔のないオーラに、トーラーの宰相のテレズマ的姿形が
融合し、再形成されてPCの霊的外形が急激に変化する。
PCが宣言する。

PC : 「われは、聖なる五つの文字に表象される
無敵の一人なり。
五界を結ぶは、われなり。
五大の漫礼を執行するは、われなり。」



6 地のミクヴァ

PCは東を向き、マルクトの神殿の至聖所に到る階段を上る。

PC：「BRVK ATH HALQINV LIBVNV ShL OVL M
(バルフ アター アド・ノイ エル・ヘヌ リボノイ シェル オイローム)
A ShR QDS hNV BMTz VThIV VTzVNV OL ARTz I
KLIM
(アシェル キドシェヌ ヴェ・ミツボサブ ヴェ・ツビアヌ アル アレツィ ケリム)」
(ヘブル語の訳文：聖なるかな、汝、主よ、わが主よ、宇宙の主よ。
主は掟により、この地の容器を浸礼することで、我らを高みに導き給う。)

神殿の東の壁が消え、濃く重い灰色の霧が壁の幅一杯に押し寄せてくる。

PCの全身がその霧堤に呑み込まれ、即座に全員が霧の中に全身を浸された。
その濃密な霧は、あなたの肌を冷たく刺すとともに、鼻孔、口、全身の毛穴を透して、容赦なく体内に侵入する。

そのとき前方のPCの指は剣指をつくり、前方に擬す。参加者もPCの動作に倣う。

PC：「七つの封印を活性化させん。」

PC：「聖なるかな汝、IAOOVA(イーアーオーオーウアー)。」

PC、参加者は剣指を両膝に当てる。

PC：「AK(アコー)」(ただ)

全員：「AK(アコー)」

PC、参加者は剣指を心臓に当てる。

PC：「MOIN(マ・ヤン)」(泉)

全員：「MOIN(マ・ヤン)」

PC、参加者は剣指を右肩に当てる。

PC：「VBVR(ヴェ・ボール)」(と水槽に)

全員：「VBVR(ヴェ・ボール)」

PC、参加者は剣指を左肩に当てる。

PC：「MQVH(ミクヴァー)」(集められし)

全員：「MQVH(ミクヴァー)」

PC、参加者は剣指を首に当てる。

PC：「ARTz(アレツ)」(地が)

全員：「ARTz(アレツ)」

PC、参加者は両手を胸の前で組む。

PC：「IH IH(イエイエー)」(あるべし)

全員：「IH IH(イエイエー)」

PC、参加者は両手を頭上高く差し出しV字を形造る。

PC：「THVR(タホール)」(清く)

全員：「THVR(タホール)」

PC、参加者は静かに両手を降ろす。このとき、全員は身体と精神の奥底まで、地の神霊の浸礼に清められた。各人は、一瞬「地」に関わるイメージを想起する。その地の神霊による高まりが鎮まると、自分の右手に平らな石で出来た印章を握りしめている。

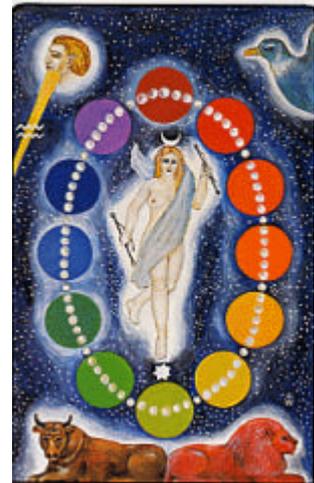
その印章は赤い滑らかな石の表面に、聖名THVRIH(テホリヤー)が3重の緑の守護線とともに緑字で刻み込まれている。

貴方はそれを左手に握り変えた。



7 風のミクヴァ

PCは仕切り壁の上にある三つの扉（小径）のうち、中央の扉に向かう。東を向き、柱を越えて、至聖所に到る階段を上る。仕切り壁の上にある三つの扉（小径）のうち、中央の扉に向かう。PCは杖で、月の召喚のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。銀色の六芒星が扉の上に輝くと、扉はタロットの「世界」の絵札に変わった。



PCはためらいもなく扉を抜け消える。

団員たちは、次々と階段を上り第32の小径に消えていく。あなたが前に進むと、四隅の四大のケルビムの像が首を曲げて、通過しようとする貴方を見るのが感じとれる。

この扉は、立体的奥行きのある3次元の像であり、女神が身体に巻き付けたカフの字の形に折れた薄衣は、彼女の背後から吹く微風にはためき揺れている。女神は不思議な微笑みを浮かべている。あなたは半透明な女性の立体像の中を通り抜け、小径に入る。

小径に入った瞬間に、全身を浮遊感が覆い。凄まじい勢いで、星降る宇宙空間を上昇する自分を感じる。紫色に近い暗黒の星空のなかに、手に触れるほど間近に巨大な満月がある。

巨大な半球から、その全貌が見えないほど視野一杯に広がり、クレーターの形が見分けられるほど月面に肉薄したかと思うと、あなたは急上昇し、月の表面をかすめるように焼けただれた岩肌の上空を飛翔する。そして、月面に着地した。荒涼とした月面風景が溶解し、イエソド神殿の床と壁が現れた。

イエソド神殿は円形の広大なホールで、壁は銀の板が隙間なく張り巡らされ、床には群青色のタイルが敷かれ、壁際の床には黒檀と銀で装飾された月の位相を表すパネルが嵌め込まれている。例えば、貴方の足もとにあるのは黒檀のみの円形（新月）であり、左手に向かって銀の三日月が増えていき、北側の壁には半月、部屋の向う側には全部銀の満月、そして徐々に欠けてきて、貴方の右側では細い三日月に変わっている。その枚数は数えると28枚あるのが分かるだろう。

正面には三日月の形をしたプールがあり、水の上を真珠母の橋が渡してある。神殿の中央の祭壇は白い大理石の立方体を上下に重ねたものであり、その上には銀の皿の中に火が灯っている。皿の回りには九本の火を点けていない蠟燭が並べてあった。その祭壇を挟むようにして、右に銀の柱が左に黒檀の柱が立ち、床と天井を結んでいる。そのさらに奥には三つの扉があり、紫のカーテンが覆っていた。天井は群青の化粧石に覆われ九つのランプが吊り下げられている。

PCは祭壇の西に立ち、大理石の祭壇を杖の基底部で叩いて九回ノックを行う。

111 111 111

PC：「我らは、第9の小径イエソドに至れり。その天球における座はレヴァナー、月の球なり。第9の小径は《純粋な知性》と呼ばれる。そは《数詞》を浄化するためなり。

そは《数詞》の表現物の設計を証明し、訂正する。

また、減らしも、分割することもなく《数詞》を組み合わせた統一体を配列する」

祭壇の上の九つの蠟燭が一斉に灯る。それと同時に、空中にジャスミンの香が漂い始める。

PCが杖を空中に掲げると、天井の九つのランプが濃い紫の光線を照射する。参会者の紫色の法衣は神殿を満たすエキセントリックな光のシャワーの中で目が痛いほど強く浮き上がる。

PC：「第9の小径の称号は《イメージの宝庫》なり。

天界の鏡たる月は地上の森羅万象を映しだし、そのイメージを蓄積し、かつ選択する」

PCが杖掲げると神殿の壁は天井から噴き出した白い霧に覆われる。水蒸気は床をなめ、団員たちの足もとを隠す。

PC：「シャダイ・エル・カイ 無敵にして、不朽、不死なる汝の名前、

凡ての生命の声により賛美されたるものよ。アーメン」

全員：「アーメン」

PCは東を向き、イエソド神殿の至聖所に面する。

全員、東を向く。

PC : 「 B R V K A T h H H A L Q I N V L I B V N V S h L O V L M
 (バルフ アター アド・ノイ エル・ヘヌ リボノイ シェル オイローム)
 A S h R Q D S h N V B M T z V T h I V V T z V N V O L R V C h N V
 K L I M
 (アシエル キドシェヌ ヴェ・ミツボサブ ヴェ・ツピアヌ アル ルアケヌ ケリム) 」
 (ヘブル語の訳文：聖なるかな、汝、主よ、わが主よ、宇宙の主よ。
 主は旋により、この風(知性)の容器を浸礼することで、我らを高みに導き給う。)

神殿の東の壁が消え、明滅する黄色い風が吹き寄せてきた。
 PCの全身がその黄風に呑み込まれ、即座に全員が吹きすさぶ風に全身を翻弄された。
 その猛烈な風は、あなたの肌を乾いた無数の針で刺すとともに、鼻孔、口、全身の毛穴を透して、容赦なく体内に侵入する。

そのとき前方のPCの指は剣指をつくり、前方に擬す。参加者もPCの動作に倣う。
 PC : 「七つの封印を活性化させん。」

PC : 「聖なるかな汝、I A O O V A (イーアーオーオーウアー)。」

PC、参加者は剣指を両膝に当てる。
 PC : 「A K (アコー)」(ただ)
 全員 : 「A K (アコー)」

PC、参加者は剣指を心臓に当てる。
 PC : 「M O I N (マ・ヤン)」(泉)
 全員 : 「M O I N (マ・ヤン)」

PC、参加者は剣指を右肩に当てる。
 PC : 「V B V R (ヴェ・ボール)」(と水槽に)
 全員 : 「V B V R (ヴェ・ボール)」

PC、参加者は剣指を左肩に当てる。
 PC : 「M Q V H (ミクヴァー)」(集められし)
 全員 : 「M Q V H (ミクヴァー)」

PC、参加者は剣指を首に当てる。
 PC : 「R V C h (ルアク)」(風が)
 全員 : 「R V C h (ルアク)」

PC、参加者は両手を胸の前で組む。
 PC : 「I H I H (イエイエー)」(あるべし)
 全員 : 「I H I H (イエイエー)」

PC、参加者は両手を頭上高く差し出しV字を形造る。
 PC : 「T H V R (タホール)」(清く)
 全員 : 「T H V R (タホール)」

PC、参加者は静かに両手を降ろす。このとき、全員は身体と精神の奥底まで、風の神霊の浸礼に清められた。各人は、一瞬「風」に関わるイメージを想起する。その風の神霊による高まりが鎮まると、自分の右手に厚地のパピルスで出来た印章を握りしめている。その印章は青く染められたパピルスの表面に、聖名R C h T z I A L (ラカツィエル)が3重の黄の守護線とともに黄字で刻み込まれている。貴方はそれを最初の印章とともに左手に握り変えた。



8 水のミクヴァ

PCは北東の扉に向かう。PCは杖で、水星の召喚のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。銀色の六芒星が扉の上に輝くと、扉はタロットの「太陽」の絵札に変わった。

PCはためらいもなく扉を抜け消える。

団員たちは、次々と階段を上り第30の小径に消えていく。あなたが前に進むと、頭上の擬人化された太陽の視線が動きを追い、その唇が微笑んだような気がした。

あなたは幼児の立体像の中を通り抜け、小径に入る。



小径に入った瞬間に、全身を浮遊感が覆い。凄まじい勢いで、星降る宇宙空間を上昇する自分を感じる。紫色に近い暗黒の星空のなかに、足下の黄金色の天体が急速に丸みを帯び、やがて真円の満月になった。前方には微かな光点が見える。このほの青い星は水星である。

我々は水星の光に導かれホド神殿に入る。

ホド神殿の床は、真珠と青金石のタイルが敷き詰められていた。そのタイルの一枚一枚には、別々の象徴が掘り込まれ、知識の絨毯を形成している。氷の壁には、タロットの大アルカナの札が、立体的に浮き上がり他のセフィロト神殿に至る門となっている。今、到着した南々西の門は「太陽」、その向かって右側、南西の門は「審判」、左側に南の「塔」と南々東の「悪魔」、そして神殿の正面に東の「吊され人」がある。氷を削りあげた祭壇には、聖なる炎が燃える坩堝が乗っていた。祭壇の向こうには、貴方の目を釘づけにする壮麗な二本の柱が立っている。左は、天井から床に落下する切れ目のない水柱であり、光り輝く滝そのものである。右は基底部の床から天井まで吹き上げる炎の柱である。

PCは祭壇の西に行き、氷塊の祭壇を杖で8回叩いてノックする。

1111 1111

PC：「我らは、第8の小径ホドに至れり。その天球における座はコーカブ、水星の球なり。

第8の小径は《絶対的知性》または《完全な知性》と呼ばれる。

それ自らが流出して来る源泉の、ゲドゥラー、すなわち《莊嚴》の隠れたる座を除いては、寄り掛かることも頼る術も持たない源初の手段である」

祭壇の上に置かれた八本の蠟燭が一斉に点る。それと同時に空中にシナモンの香りが漂い始める。PCが杖を掲げると天井の八つのランプからオレンジ色の光線が放たれる。参会者オレンジの法衣が眩しく輝く。

PC：「第8の小径の体験は《輝きの幻視》なり。

光の殿堂たる《水の神殿》にて、真実の光を見いださん」

PCが杖を掲げると濃密な霧が現れ足元を隠す。

PC：「エロヒム・ツァバオト 守護者たるエロヒムよ。

創造の水の面を動かしたるルアク・エロヒムに栄えあれ。アーメン」

全員：「アーメン」

PCは東を向き、ホド神殿の至聖所に面する。

全員、東を向く。

PC：「BRVK ATH HALQINV LIBVNV ShL OVL M

(バルフ アター アド・ノイ エル・ヘヌ リボノイ シェル オイローム)

AShR QDS hNV BMTz VThIV VTz VNV OL MIMI

KLIM

(アシェル キドシェヌ ヴェ・ミツボサブ ヴェ・ツピアヌ アル マイマイ ケリム)」

(ヘブル語の訳文：聖なるかな、汝、主よ、わが主よ、宇宙の主よ。

主は掟により、この水の容器を浸礼することで、我らを高みに導き給う。)

神殿の東の壁が消え、青い巨大な水塊が押し寄せてきた。
P Cの膝が、腰が、胸が水に浸され、瞬時に貴方も冷たい水のなかに浸され視界を奪われた。
その水は、あなたの包み込み、鼻孔、口、全身の毛穴を透して、容赦なく体内に侵入する。



そのとき前方のP Cの指は剣指をつくり、前方に擬す。参加者もP Cの動作に倣う。P Cの声は微かに歪んでいるが、水中を明瞭に響いてくる。

P C：「七つの封印を活性化させん。」

P C：「聖なるかな汝、I A O O V A（イーアーオーオーウーアー）。」

P C、参加者は剣指を両膝に当てる。

P C：「A K（アコー）」（ただ）

全員：「A K（アコー）」

P C、参加者は剣指を心臓に当てる。

P C：「M O I N（マ・ヤン）」（泉）

全員：「M O I N（マ・ヤン）」

P C、参加者は剣指を右肩に当てる。

P C：「V B V R（ヴェ・ボール）」（と水槽に）

全員：「V B V R（ヴェ・ボール）」

P C、参加者は剣指を左肩に当てる。

P C：「M Q V H（ミクヴァー）」（集められし）

全員：「M Q V H（ミクヴァー）」

P C、参加者は剣指を首に当てる。

P C：「M I M（マイム）」（水が）

全員：「M I M（マイム）」

P C、参加者は両手を胸の前で組む。

P C：「I H I H（イエイエー）」（あるべし）

全員：「I H I H（イエイエー）」

P C、参加者は両手を頭上高く差し出しV字を形造る。

P C：「T H V R（タホール）」（清く）

全員：「T H V R（タホール）」

P C、参加者は静かに両手を降ろす。このとき、全員は身体と精神の奥底まで、水の神霊の浸礼に清められた。各人は、一瞬「水」に関わるイメージを想起する。その水の神霊による高まりが鎮まると、自分の右手に新たな木製の印章を握りしめている。

その印章は黄色く染められた木肌に、聖名A M I H（アマアー）が3重の青の守護線とともに青字で刻み込まれている。

貴方はそれを他の2枚の印章とともに左手に握り変えた。



9 火のミクヴァ

PCは南の扉に向かう。PCは杖で、金星の召喚のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。銀色の六芒星が扉の上に輝くと、扉はタロットの「塔」の絵札に変わった。

PCはためらいもなく扉を抜け消える。

団員たちは、次々と階段を上り第27の小径に消えていく。あなたが前に進むと、上空に炸裂する稲妻と爆発する塔の頂部から衝撃波とともに、強烈な熱気を感じる。塔のなかを通過するあなたの周囲に落下する人々の絶叫が胸を撃つ。



小径に入った瞬間に、全身を浮遊感が覆い。凄まじい勢いで、再度、星降る宇宙空間を上昇する自分を感じる。紫色に近い暗黒の星空のなかに、足下のほの青い天体が急速に遠ざかる。前方には、強く煌めく光点が見える。この白々とした光り輝く星は金星である。

我々は金星の光に導かれネツアク神殿に入る。

神殿の内壁は深緑色の水晶で、その半透明の壁を光が透過して、あたかも深い海の底にいるように感じる。そして、水晶と珊瑚で出来た七つの薔薇が神殿の内壁の上を取り巻き、プリズムの作用をなして虹のアーチを中心に投げ掛けている。床は冷たく滑らかな翡翠と青銅のタイルからできており、さらにホドの神殿と同様な「火」と「水」の柱が立っている。祭壇は暗色の翡翠で出来ており、その上には口を開いた大きな蠣の貝殻が乗り、薔薇色の生ける炎を覗かせている。今、貴方が通ってきた門を含め五つのタロットの扉が神殿の北西から東までの方位に開いている。

PSは祭壇の西に行き、翡翠の祭壇を7回杖で叩いてロックを行う。

111 111 1

PS：「我らは、第7の小径ネツアクに到れり。その天球における座はノガー、金星の球なり。第7の小径は《隠れた知性》と呼ばれる。そは知性の視座と、信仰への観想によって達成される総ての知性的な徳目が、燦然と輝けるものなり」

祭壇の上の7本の蠟燭が灯る。同時に濃厚な薔薇の香りが漂い始める。

PSが杖を掲げると壁の7つの薔薇が強いエメラルドの光を放った。参加者の緑の法衣が、宝石のように輝く。

PS：「第7の小径の体験は《凱旋する美の幻視》なり。
高き次元の愛は、宇宙の両極の燃え上がる統合であり、恍惚の美である。
めくるめく力の氾濫のうちに薔薇とランプの秘儀を語らん」

PSが杖を掲げると、2本の柱の中間から、床を覆う濃い霧が発生する。濃密な緑の蒸気は、神殿の内部に満ち溢れる生命エネルギーの震動を受けてゆらめいた。

PS：「ヤーヴェ・ツァバオト。守護者たる主よ、万軍の指揮官たる汝を礼拝する。アーメン」
全員：「アーメン」

PCは東を向き、ネツアク神殿の至聖所に面する。

全員、東を向く。

PC：「BRVK ATH HALQINV LIBVNV ShL OVL M
(バルフ アター アド・ノイ エル・ヘヌ リボノイ シェル オイローム)
AShR QDS hNV BMTz VThIV VTzVNV OL ASh
KLIM
(アシエル キドシェヌ ヴェ・ミツボサブ ヴェ・ツピアヌ アル エシュ ケリム)」
(ヘブル語の訳文：聖なるかな、汝、主よ、わが主よ、宇宙の主よ。
主は錠により、この火の容器を浸礼することで、我らを高みに導き給う。)

神殿の東の壁が消え、赤熱の爆光が吹き寄せた。
PCの全身が瞬時に燃え上がるのを目にした瞬間、瞬時に
貴方も全身を天上の火で焼き尽くされる。
鋭い痛みと熱を感じるとともに、その炎は鼻孔、口、全身
の毛穴を透して、容赦なく体内に侵入する。

そのとき前方のPCの指は剣指をつくり、前方に擬す。参
加者もPCの動作に倣う。自分の指が焼け残っているかさだ
かでないが、必死に模倣する。
PC：「七つの封印を活性化させん。」

PC：「聖なるかな汝、IAOOVA（イ-ア-オー-オーウ
-アー）。」

PC、参加者は剣指を両膝に当てる。
PC：「AK（アコー）」（ただ）
全員：「AK（アコー）」

PC、参加者は剣指を心臓に当てる。
PC：「MOIN（マ・ヤン）」（泉）
全員：「MOIN（マ・ヤン）」

PC、参加者は剣指を右肩に当てる。
PC：「VBVR（ヴェ・ボール）」（と水槽に）
全員：「VBVR（ヴェ・ボール）」

PC、参加者は剣指を左肩に当てる。
PC：「MQVH（ミクヴァー）」（集められし）
全員：「MQVH（ミクヴァー）」

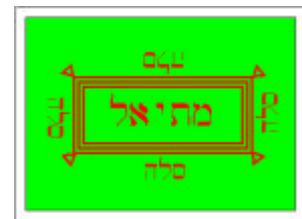
PC、参加者は剣指を首に当てる。
PC：「ASH（エシュ）」（火が）
全員：「ASH（エシュ）」

PC、参加者は両手を胸の前で組む。
PC：「IH IH（イエイエー）」（あるべし）
全員：「IH IH（イエイエー）」

PC、参加者は両手を頭上高く差し出しV字を形造る。
PC：「THVR（タホール）」（清く）
全員：「THVR（タホール）」

PC、参加者は静かに両手を降ろす。このとき、全員は身体と精神
の奥底まで、火の神霊の浸礼に清められた。各人は、一瞬「火」に関
わるイメージを想起する。その火の神霊による高まりが鎮まると、自
分の右手に新たな金属の印章を握りしめている。

その印章は緑の地金に、聖名MThIAL（メシエル）が3重の赤
の守護線とともに赤字で刻み込まれている。
貴方はそれを他の3枚の印章とともに左手に握り変えた。



10 光のミクヴァ

PCは北東の扉に向かう。PCは杖で、太陽の召喚のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。銀色の六芒星が扉の上に輝くと、扉はタロットの「死」の絵札に変わった。

PCはためらいもなく扉を抜け消える。

団員たちは、次々と階段を上り第24の小径に消えていく。あなたが前に進むと、死神の巨大な鎌が一閃し、首筋を伶俐な刃がすり抜けていくのを感じた。重いフードのなかで死神の虚ろな眼窩が確かに笑った。

小径に入った瞬間に、全身を浮遊感が覆い。凄まじい勢いで、再度、星降る宇宙空間を上昇する自分を感じる。紫色に近い暗黒の星空のなかに、足下の光輝く天体が急速に遠ざかる。

前方の暗黒の空間に虹の七色を宿したオーロラが、その揺れる帳を全周に広げて出現した。

あなたは、オーロラの形をしたパロケスに突入した。

強い香が匂う。貴方は全身を虹の色彩で包まれ、揺らめく帳を1枚1枚、突き抜けていく。その度に光体に軽い衝撃が走る。その振動を7回数えたときパロケスを完全に通過した。

薄い帳を通過する度に、あなたは自分の光体から地上的な重いものが薄皮をむくように剥離していくのを感じる。



次に出現したのは、黄金の球体、太陽である。

プロミネンスが紅蓮の炎をあげる太陽面が手にとるように見える。

我々は太陽の光に導かれティファレット神殿に入る。

ティファレット神殿の内部は正八角形の床と化粧板を貼った丸天井、黄金のパネルで埋められた側面に開く八つの扉から成り立っていた。

あなたはその西側の扉から神殿に入った。神殿の少し高くなった中央部には四つの黄金の御座が東西南北を向いて置いてあり、その内側に天井まで届く大理石の柱と磨いた祭壇が立っている。神殿全体は天井の6本の灯火が発する淡い黄金色の照明で照らされていた。

同じく大理石の床を踏み締めて、あなたは神殿内のしかるべき位置につく。

PCは祭壇の西に行き、白大理石の祭壇に向かい、祭壇の上の布を被った盃を避けて、杖で6回ノックする。

11 11 11

PC：「我らは、《魂の暗き夜》を越え、ここ第6の小径、ティファレットに到れり。

天球における座はシエメッシュ、太陽の球なり。

第6の小径は《媒介的影響力の知性》と呼ばれる。その中で流出の流れは倍加し、かの影響力は総ての至福の貯水池に流れ込み、あらゆる流れは自らひとつになる。」

祭壇の上の6本の蠟燭が灯る。同時に乳香の香りが漂い始める。

PCが杖を掲げると天井の燭台が黄金の眩い光線を放ち、参会者の法衣を豪華な輝きで浮き上がらせた。

PC：「第6の小径の体験は《十字架の密儀》なり。

死して復活せる神々の伝説と、その表象せる自然の周期に思いを馳せよ」

PCが杖を掲げると、神殿の内部に微細な黄金の粒子が充満し、濃密な黄金の霧となって参会者の胸までを覆った。その金属の霧は聖名を振動させるPCの声に共鳴して、神殿内部を反響する深い波動で満たす。

PC：「ヤーヴェ・エロア・ヴァ・ダート。顕現せる神よ。神の知識に礼拝する。アーメン」

全員：「アーメン」

PCは東を向き、ティファレット神殿の至聖所に面する。

全員、東を向く。

PC：「BRVK ATH HALQINV LIBVNV ShL OVL M

(バルフ アター アド・ノイ エル・ヘヌ リボノイ シェル オイローム)

AShR QDS hNV BMTz VThIV VTz VNV OL AVR

KLIM

(アシエル キドシエヌ ヴェ・ミツボサブ ヴェ・ツピアヌ アル オール ケリム)」
(ヘブル語の訳文：聖なるかな、汝、主よ、わが主よ、宇宙の主よ。
主は掟により、この光の容器を浸礼することで、我らを高みに導き給う。)

神殿の東の壁が消え、穏やかな光が差し込んできた。
瞬時に神殿のすべてが光のミクヴァに満たされた。

そのとき前方のPCの指は剣指をつくり、前方に擬す。参加者もPCの動作に倣う。
PC：「七つの封印を活性化させん。」

PC：「聖なるかな汝、IAOOVA（イーアーオーオーウーアー）。」

PC、参加者は剣指を両膝に当てる。
PC：「AK（アコー）」（ただ）
全員：「AK（アコー）」

PC、参加者は剣指を心臓に当てる。
PC：「MOIN（マ・ヤン）」（泉）
全員：「MOIN（マ・ヤン）」

PC、参加者は剣指を右肩に当てる。
PC：「VBVR（ヴェ・ボール）」（と水槽に）
全員：「VBVR（ヴェ・ボール）」

PC、参加者は剣指を左肩に当てる。
PC：「MQVH（ミクヴァー）」（集められし）
全員：「MQVH（ミクヴァー）」

PC、参加者は剣指を首に当てる。
PC：「AVR（オール）」（光が）
全員：「AVR（オール）」

PC、参加者は両手を胸の前で組む。
PC：「IH IH（イエイエー）」（あるべし）
全員：「IH IH（イエイエー）」

PC、参加者は両手を頭上高く差し出しV字を形造る。
PC：「THVR（タホール）」（清く）
全員：「THVR（タホール）」

PC、参加者は静かに両手を降ろす。このとき、全員は身体と精神の奥底まで、光の神霊の浸礼に清められた。各人は、一瞬「光」に関わるイメージを想起する。その光の神霊による高まりが鎮まると、自分の右手に新たな軽石のような不思議な物質で出来た印章を握りしめている。

その印章は、四大の浸礼とは異なり五角形の守護線のなかに、聖名が2行にわたり書き込まれている。聖名QVMHVN HMQDS h（コマン ハ・ミクデシュ）が紫字で刻み込まれている。

貴方はそれを他の4枚の印章とともに左手に握り変えた。



11 ダアスの広間への入場

PCは東の扉の前に立ち、杖で、土星の召喚のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。銀色の六芒星が扉の上に輝くと、扉の前に5人の大天使が出現する。真中に3人、左右に2人である。

PCは最も前方にいる大天使に向き合う。

彼女は、強烈な威嚇的な光を放つ金属の円盤を豊かな胸の真下に掲げ、挑戦的な視線を向けた。

PC：「汝、地のミクヴァを宰領せし大天使ウリエル・アレツィエルよ。
主の基盤に至りし者を殺傷せる大天使よ。
主の基盤に至りし者を守護する大天使よ。
わが手にある聖なる印章を見よ。」

PCはテホリヤー(תְּהוֹרִיָּה)の印章を示す。

印章を確認した大天使ウリエル・アレツィエルは、円盤を裏返した。

その背後から、もう一人の大天使が前に出る。PCは、この大天使に向き直る。

かれは、鋭い短剣を手に殺意に満ちた視線を向けた。

PC：「汝、風のミクヴァを宰領せし大天使ラファエル・ルアキエルよ。
自由なる精神を抹殺する大天使よ。
自由なる精神を守護する大天使よ。
わが手にある聖なる印章を見よ。」

PCはラカツィエル(רַאֲפָאֵל)の印章を示す。

印章を確認した大天使ラファエル・ルアキエルは、短剣を鞘に収めた。

PCは左翼の大天使に向き直る。

彼女は、しなやかな鞭を手にしている。

PC：「汝、水のミクヴァを宰領せし大天使ガブリエル・マイメルよ。
変幻自在なる業師を殺戮する大天使よ。
変幻自在なる業師を守護する大天使よ。
わが手にある聖なる印章を見よ。」

PCはエミアー(עִמְיָא)の印章を示す。

印章を確認した大天使ガブリエル・マイメルは、鞭を下げた。

PCは右翼の大天使に向き直る。

かれは、火のついた棍棒を手にしている。

PC：「汝、火のミクヴァを宰領せし大天使ミカエル・エシュエルよ。
変幻自在なる業師を殺戮する大天使よ。
変幻自在なる業師を守護する大天使よ。
わが手にある聖なる印章を見よ。」

PCはメシエル(מִשְׁיָאֵל)の印章を示す。

印章を確認した大天使ミカエル・エシュエルは、棍棒を下げた。

PCは最後の中央の大天使に向き直る。

彼女は、弓を手にしている。

PC：「汝、光のミクヴァを宰領せし大天使サンダルフォン・オーリエルよ。
無窮なるものの探求者を滅する大天使よ。
無窮なるものの探求者を立てる大天使よ。
わが手にある聖なる印章を見よ。」

PCはコマン・ハ・ミクデシュ(קוֹמְדֵשׁוּן הַמְּקַדְשִׁים)の印章を示す。

印章を確認した大天使サンダルフォン・オーリエルは、弓を引き絞り、われわれの頭上に矢を放った。大風が巻き起こり、軍団の角笛の音がわき上がる。

前方の扉の奥から主の栄光が顕れた。

団員は、ひとりひとりが天使長と対峙し、正確な印章を明示しなくてはならない。

あなたの番が来た。左手の印章の中から最初の印章を右手に持ち替える。

あなたは最も前方にいる大天使ウリエル・アレツィエルに向き合う。

彼女は、再度、強烈な威嚇的な光を放つ金属の円盤を豊かな胸の真下に掲げ、挑戦的な視線を向けた。円盤から発する稲妻が、あなたの胴体の直前で炸裂し、静電気で肌がちりちりとする。

空気の焼けるオゾンの臭いがする。あなたの目は連続する電光で半ば眩まされた状態だ。
威嚇する雷光の警告は、破滅の天使に対峙する恐怖を再認識させる。

「汝、地のミクヴァを宰領せし大天使ウリエル・アレツィエルよ。
主の基盤に至りし者を殺傷せる大天使よ。
主の基盤に至りし者を守護する大天使よ。
わが手にある聖なる印章を見よ。」
あなたはテホリヤー (תְּהוֹרִיָּה) の印章を示す。
印章を確認した大天使ウリエル・アレツィエルは、円盤を裏返した。
その背後から、もう一人の大天使が前に出る。あなたは、この大天使に向き直る。
かれは、鋭い短剣を手に殺意に満ちた視線を向けた。

「汝、風のみくヴァを宰領せし大天使ラファエル・ルアキエルよ。
自由なる精神を抹殺する大天使よ。
自由なる精神を守護する大天使よ。
わが手にある聖なる印章を見よ。」

あなたはラカツィエル (רַאֲפָאֵל) の印章を示す。
印章を確認した大天使ラファエル・ルアキエルは、短剣を鞘に収めた。
あなたは左翼の大天使に向き直る。
彼女は、しなやかな鞭を手にしている。

「汝、水のみくヴァを宰領せし大天使ガブリエル・マイメルよ。
変幻自在なる業師を殺戮する大天使よ。
変幻自在なる業師を守護する大天使よ。
わが手にある聖なる印章を見よ。」

あなたはエミアー (מִימֵל) の印章を示す。
印章を確認した大天使ガブリエル・マイメルは、鞭を下げた。
あなたは右翼の大天使に向き直る。
かれは、火のついた棍棒を手にしている。

「汝、火のみくヴァを宰領せし大天使ミカエル・エシュエルよ。
変幻自在なる業師を殺戮する大天使よ。
変幻自在なる業師を守護する大天使よ。
わが手にある聖なる印章を見よ。」

あなたはメシエル (מִיכָאֵל) の印章を示す。
印章を確認した大天使ミカエル・エシュエルは、棍棒を下げた。
あなたは最後の中央の大天使に向き直る。
彼女は、弓を手にしている。

「汝、光のみくヴァを宰領せし大天使サングルフォン・オーリエルよ。
無窮なるものの探求者を滅する大天使よ。
無窮なるものの探求者を立てる大天使よ。
わが手にある聖なる印章を見よ。」

あなたはコマン・ハ・ミクデシュ (קוֹמַנְהָא מִקְדֵּשׁ) の印章を示す。
印章を確認した大天使サングルフォン・オーリエルは、弓を引き絞り、われわれの頭上に矢を放った。大風が巻き起こり、軍団の角笛の音がわき上がる。
前方の扉の奥から主の栄光が顕れた。

サングルフォン・オーリエルは右手をあなたの方に振ると、目に見えない贈り物を、あなたの胸に授ける。それは、あなたに対する通過認証である。あなたは門をくぐる。

門の彼方にはダアスの広間があった。ダアスの広間は、非在の広間である。
それは「生命の木」の図像に引かれた仮想の小径、いわゆる「隠された小径」のひとつである。
別の視点をを用いると「知識の小径」は「善と悪の知識の木」が「生命の木」と交わる場所であり、一刹那の「御座の宝玉」の顕現である。

あなたの前に、見渡す限りの白銀の輝きが広がっている。真冬の太陽に照り映える湖の面のように、渦巻く光が湧きかえっている。

目映い光線に目をくらませながら、上空を見上げると鏡写しのように白銀の輝きが広がっている。上下の光の氾濫は、大いなる海のようにでもあり、冷たく燃える炎の壁のようにでもある。どこからともなく天使の声が聞こえる。

「ラキアとラキアの間に水がある。
水と水の間に火がある。
火と火の間に水がある。
水と水の間に火と拝礼と水がある。」

しかし、これを見て「水だ、水だ。」と叫んではいけない。

広間の床と天井の大理石の輝きは、天界の第6宮殿の反映である。真っ直ぐに横切りなさい。前方に青銅色の輝きがある。

ダアスの広間の中央には、地上の契約の筐の天上の対応物が栄光の祭壇として安置されていた。



春分の主祭が執行される。

12 春分の主祭

PC：「栄光の祭壇に宇宙の軸を召喚せん。
I a H a V a H a (ヤァー・ハァー・ヴァァー・ハァー)
H e V e H e I e (ハイ・ヴェイ・ヘイ・イエイ)
V o H o I o H o (ヴォー・ホォー・イョー・ホォー)
H I H V (ヘー・ヨド・ヘー・ヴァウ)」

PCが宣言する。

PC：「大いなる周行をもって、祭壇に集中せん。」

栄光の祭壇を軸として、3度周行する。

PC：「神秘なる周行は完成し、昼と夜は均衡した。
秋分は到来せり。」



PCは、祭壇の西に廻り、東に向かってハーボクラテスのサインを行う。
PC：「全き光に拝礼す。闇は光に内在せり。神殿の古きパスワードは・・・なり。」

PCは、祭壇の東に廻り、西に向かってホルスのサインを行う。
PC：「深き闇に拝礼す。光は闇より生まれたり。神殿の新しきパスワードは・・・なり。」

PC：「パスワードは交換された。」

全員が祭壇を取り囲む。

PC：「腕を組み、手と手を取りて、われらのオーラをひとつに融け合わせよう。
無敵なる主の顕現にあずかりて、われらの靈魂をひとつとなし、
そをもちて、この神殿は栄光の場とならん。」

全員が手を組み輪のなかに栄光の祭壇を包み込む。
手を放すことなく次を唱える。

全員：「主よ。われらは自らを捧げん。
わが心臓と靈魂は、汝への絶ゆることなき供物とならん。
汝が御手の技の裔を受け、汝の意志のままに与え、奪いたまえ。アーメン。」

13 マルクト神殿への帰還

われわれは、ダアスの広間からマルクト神殿へ帰還する。

全員、東を向く。

全員：「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！
聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！
聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！
光と闇の主よ。」

PC：「聖なる場に神秘なる逆周行を起こさん。」
全員がPCに続き三度周行し、左回りの渦が形成された。

PCが発言する。

PC：「神秘なる逆周行は完成した。マルクト神殿に帰還せん。」

PCに続き全員が神殿の西側に移動する。磨き抜かれて白く輝く大理石の床と天井が、禁じられた「水」の面を連想させる広大な広間を横切ると、西側の壁に白と黒のヘルメスの杖が柱のように立ち聳え、その間に門を造っていた。

非在の広間から、一挙にティファレト神殿に戻る。

PCは、神殿の西に行き太陽の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描き、裏側から見た「死」の扉を出現させる。PCは第24の小径に消えていく。

あなたは、先行する団員に続き、その透明な扉に潜り込み、死神の大釜をまたぎ越す。今度は妨害はなかった。あなたは無重力感に包まれた。

紅蓮の炎をあげる太陽の表面をかすめるようにして、オーロラの形をしたパロケスに突入した。上昇時と同じく強い香が匂う。貴方の全身は、虹の色彩で包まれ、揺らめく帳を1枚1枚、突き抜けていく。その度に光体に軽い衝撃が走り、何かが纏わりつく。その振動を7回数えたとき無事に帳を通過し、それを通過して白く輝く金星を見る。その金星は瞬く間に過ぎ去り、水星が現れる。宇宙の直中に半透明のタローの「塔」の門を通過して、水星の表面をかすめ、水星は瞬時に後方に消える。手に触れるほど間近に巨大な満月を見る。あなたは、タローの「太陽」を通過し、月の反対側から表面をかすめるように下降し、巨大な円盤状の地球を見下ろす。

PCが地球の円盤の上に、月の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。銀色の六芒星が輝くと、地球光の中心に裏返しの「世界」の絵札が現れる。PCは扉を抜け、地球に降下する。団員たちに続き、あなたも半透明な女性の立体像の中を通り抜け、マルクト神殿に帰還した。

PCは全員の帰還を確認するとマルクト神殿の東壁の第32の小径を不活性化する。

14 天使の出立

PCは祭壇の西に行き、東を向く。

PC：「聖なる五つの文字に表象される長老たちよ。
I H S h V H (ヨド・ヘー・シン・ヴァウ・ヘー)
万軍の将、霊の虚の場所に住まわん。
I H V S h H (ヨド・ヘー・ヴァウ・シン・ヘー)
戴冠せる王、霊の虚の場所に住まわん。
光と闇の轆轤を逆転し、魔術師の肉体を脱ぎ捨て、光へと帰還せん。」

PC：「主よ、われらの賛歌を聞きたまえ。宇宙の韻律と調和に、感謝を捧げん。
主の聖霊は、森羅万象の上であり、下であり、内にあり、外にもある。
主よ、生ける霊と人の子らに、法悦と祝福を与えたまえ。
律法の宰相は、肉の衣を去れり。」

全員：「主よ、われらに祝福あれ。われらは絶えることなく汝を称えん。」

15 地上への帰還

PC：「人の子らよ。律法の宰相は、去れり。地上に帰還せん。」

PCは《ヴェールを閉じる》サインを行う。

PC：「I H S h V HとI H V S h Hの御名において、
この儀式により拘束されし、すべての《霊》を解放せん。」

PC：「われは宣言する。神殿作業は終了せり。」

全員：「神殿作業は終了せり。アーメン。」

神殿の外へ出る。神殿の外庭でウシャブティを解放し、光の洞窟を通過して光体は自分の部屋に戻る。静かに肉体に戻る。四肢の感覚が戻ったところで、光の法衣を脱ぐ。（特別な手順は必要ない。）静かに目を開き、立ち上がる。

法衣を着用している場合は、沈黙のうちに着替える。

普段着に戻り、儀式についての個人的メモ（『魔法日記』用）を終わるまで、この沈黙を続けるのが望ましい。その後は、軽い食事、飲み物等を探り、地上に帰還したことを自分自身に印象づけること。

VERBORUM PUBLICA
I O S
RITUALE DE
AEQUINOCTIO AUTUMNO A

IMPRIMI POTEST: I O S
NIHIL OBSTAT QUOMINUS IMPRIMATUR
IMPRIMATUR : M.E.S.A. 5=6
MARTIUS MCMXCX

秋分儀式 A E O 3 A

Copyrights © All rights reserved I O S 2003

2003年9月14日 I O S 発行

本文書は、複数のまたは個人の団員が、魔術実践の練習のために使用するものであり、I O S の公式儀式手順書ではない。従って、本儀式を公に実施するテンプル、ロッジはその旨を会員に明確に告示する必要がある。しかし、それは同時に本文書を利用した会員の自由な実践活動を妨げるものではない。会員外の使用については、I O S の許可が必要である。本文書の著作権は団に所属する。本文書の内容の一部または全部を、団の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。